受付番号　第 *2024004* 号

承認日：2024 年 4 月 17 日

研究概要

1.　研究名称 または課題名テーマ等

側弯症装具治療の開始年齢と生活環境の変化による装着時間への影響

2.　研究責任者(当院)

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：木村　弘美

3.　分担研究者

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：大﨑　美奈子、小谷　俊明

4.　研究対象者

新規で側弯症装具治療を開始する 10 歳から 15 歳の患児。

Cobb 角 20 から 40 度で頂椎 T 7 以下。

装具治療 2 年経過もしくは、装具治療終了時点で、研究終了となる。

2021 年 9 月 1 日～現在まで継続中の対象者で、装具治療 1 年経過した 87 名。

5.　研究の必要性

特発性側弯症は、10 代のうちに小学校、中学校でのモアレ検診、運動器検診で見つかることが多い。Cobb 角 20 度を超えると装具治療が必要になる。基本入浴時間以外、20 時間以上の装着が治療効果として必要とされる。装着時間は本人、保護者からの聞き取りであり、信頼性があるとは判断しにくかったが、2018 年に、ボタン電池式の温度感知器、温度ロガーを使用しての装具装着時間の把握が可能であると研究報告した。2021 年には、装具治療からくる心理的ストレスを評価するための指標となるエビデンス報告は少なかった為、心理的ストレスを評価する、日本語版 JBSSQ-brace を用いてのアンケート調査をおこなった。結果は、約 3～4 割の患児が装具開始直後から中程度のストレスを感じていることがわかった。2022 年に、装着時間の実態と装着時間に影響を及ぼす関連因子がないか調査し、約 4 割が 20 時間の装具装着が困難であり、開始初期から後ろ向きな訴えがある患児は、装着が不十分となる可能性が高く、また、時間経過とともに起こる生活背景の変化により、装具に難色を示す傾向があることを研究報告した。しかし、どのような生活背景の変化が装着時間に影響を及ぼしているかは明らかではなかった。今回、87 名の対象者において、装具治療開始時の年齢と学年から、1 ヶ月後、6 ヶ月後、9 ヶ月後、1 年後の受診時の年齢と学年を確認し、小学生から中学生になり生じる学校環境の変化が、装具装着時間に影響を与える要因のひとつとなっているのか、温度ロガーによる装着時間の経時記録と比較検討する。本研究の目的は、装具治療継続が困難な要因のひとつとされる、年齢ごとの学校生活における環境において、年齢経過と装具治療経過を装具装着時間で比較し関連があるか明らかにする。装具治療継続の適切な看護介入のポイントを見極め、その後の診療への関わりを看護としてどう支援していくか考える。

6.　研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

温度ロガーの活用により、患児の装具装着時間が正確に把握でき、今後の装具治療効果の判断や心理的影響との関連分析に役立つ。看護として患児、保護者に対し装具治療時の身体的、精神的な関わりの適切な支援に繋がると考える。

7.　対象者､関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1155